

下肢静脈瘤

心臓から出た血液は手や足などの末梢へ行き、また心臓へ戻ってきますが、手足には心臓が無いので、筋肉が収縮することで血液を送り出しています。ただ送り出すだけでは重力の影響で戻ってしまうので、静脈には一度送られた血液が戻らないように、所々に弁が付いています。この弁の機能が壊れて血液が逆流し、静脈が瘤のように腫れるのが静脈瘤です。静脈瘤は重力の影響を受けやすい下肢に多く見られます。(図1)

下肢静脈瘤は、40歳以上に多く認められ、年齢とともに増加していきます。男女比はおおよそ1:4と女性に多く、患者数は1000万人以上と推定されます。遺伝性が認められ、妊娠や立ち仕事で発症しやすく、肥満や便秘などが悪化させる因子となります。

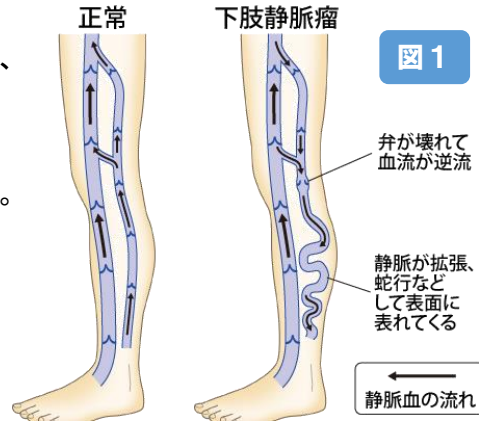


図1

種類

下肢静脈瘤は目で見た太さによって伏在型・側枝型・網目状・くもの巣状の4種類に分類されます。(図2)
一般的に症状があり、外科的な治療が必要になるのは伏在型静脈瘤だけであり、他の3種類は軽症であまり心配のない静脈瘤です。

伏在型	
大伏在静脈瘤	最も多いタイプで、足のつけ根の静脈弁が壊れておこり、膝の内側に静脈瘤が目立ちます。
小伏在静脈瘤	比較的少なく、膝の後ろ側の静脈弁が壊れておこり、ふくらはぎに静脈瘤が目立ちます。
網目状・くもの巣状	太ももの外側や膝の内側やくるぶしによく見られます。通常、症状はなく、また重症化しないので基本的には治療の必要のない静脈瘤です。

症状

静脈瘤があると、浮腫みやだるさ、こむら返りが起こりやすいなどの症状がでます。重症化するとうっ滞性皮膚炎を合併し、さらに悪化すると皮膚潰瘍になってしまいます。



治療

治療が必要な場合は、うっ滞性皮膚炎がおこっている場合か、静脈瘤による症状があつてつらい場合、あるいは、本人が外見を気にする場合の3つです。下肢静脈瘤の症状を和らげるのに、まず弾性ストッキングを着用します。1ヶ所に長時間じっと立っているのは避け、できるだけ歩き回ったり、1時間に1回程度は休憩をとるようにしましょう。パソコンなどの作業で、椅子に長時間座ったままもよくないので、足首の運動をしたり、足台で足を高くするようにしましょう。お風呂で足のマッサージをしたり、就寝時に足を高くするのも効果的です。以前は、静脈瘤を起こしている伏在静脈を引っこ抜いてしまうストリッピング術が行われていましたが、侵襲が大きいため、近年は血管内焼灼治療といって、静脈を引き抜くかわりに、細いカテーテルを病気になる静脈の中に入れて、内側から熱を加えて焼灼してふさぐ治療が行われます。また、最近ではさらに進歩して、下肢静脈専用開発された医療用接着材をカテーテルで注入して血管を閉塞する、血管内接着材治療が行われるようになりました。これは血管内焼灼術と比べて、熱を伴わないので、やけどや神経障害など周辺組織への影響や痛みが少ないのが特長です。

図2



伏在型 側枝型 網目状 くもの巣状